

## 現代における媽祖信仰のあり方 —「世界媽祖會北港」現地調査報告—

川島 麻衣

### 現代媽祖信仰の動態 —“世界媽祖會北港”現場調査報告—

川島 麻衣

#### 摘 要

媽祖信仰是一种女神信仰，同时也是母性神信仰。媽祖出生在宋代福建省莆田湄洲島，具有預知吉凶禍福的能力。当初，媽祖在福建省、广东省等南部沿海地区受到崇拜，之后，媽祖信仰的范围得到扩大。如今，除中国南部和台湾一带以外，日本、欧美、非洲也建有媽祖廟。那么，媽祖信仰的特点在媽祖廟会上有怎样的反映呢？为了参加首届“世界媽祖會北港”，笔者2013年9月访问了台湾雲林县北港的朝天宮。两岸各地及其他国家地区的媽祖首次共聚北港會香。此次廟会异于普通廟会的地方在于，其主要目的是将作为“世界和平女神”的媽祖女神传播至台湾和全世界。虽然该活动没有上演有关媽祖传说的戏剧，但笔者有幸阅览了融合传统和现代丰富文化资料。

目次

はじめに

1. 北港朝天宮の概要
2. 現地調査報告
3. 「世界媽祖會北港」の目的とその背景

4. 本廟会にみえるイベント性

おわりに

注

参考文献

## はじめに

古来、東アジア世界では、「人」が信仰の対象となり、実在した幾人もの「人」が後世の人々に神として崇められ、神像の姿となって廟に祀られている。こうした「人神」は言わば日常的な存在であり、とりわけ中国には数えきれないほど多くの「人神」を主神とした民間信仰が存在している。これらの神々の中には、生前偉業を成し、或いは高德を積んだ者が、死後神となって信仰の対象になることが少なくない。海運安寧の神媽祖もまた、その「人神」の一人である。媽祖は福建省莆田市湄洲島を発祥地とする女神であり、宋代に実在した巫女「林氏女」がモデルだとされている。福建省は古来巫術に携わる女性が多く、歴史を見ても比較的女神崇拝が盛んな地であった<sup>1</sup>。媽祖は当初福建省を中心とした中国南部沿岸地域で主に信仰されていたが、17世紀福建省の人々が台湾に移住してくると共に信仰も台湾に持ち込まれ、以後台湾で爆発的な人気を誇るようになった。今日では日本や欧米、アフリカ地域等にも媽祖廟が建てられ、世界各地で信仰されている。中国の民間信仰が通常地域に根付いた限定的な範囲で信仰されるのに対し、媽祖信仰が海を越えて広範囲に広がったのは驚くべき事であり、他神の信仰とは明らかに異なる様相を呈していると言える。今回現地調査を行ってきた「世界媽祖會北港」は、その媽祖信仰の特異性を表出した一例として挙げる事ができる。本廟会は、媽祖廟はもちろんの事、通常どこの神廟でも行なわれる主神の生誕祭や春節時に開催される廟会<sup>2</sup>とは性質の異なるものであり、極めて新しい形を示している。「世界媽祖會北港」は、2013年に初めて開催が決定した廟会であり、その名の通り世界中の媽祖信仰の信者による一大イベントである。開催自体は9月であるが、事前の記者会見は6月の時点ですでに開かれており、第1回にもかかわらず世界各地から媽祖神像が集結するとあって、新聞各社が挙ってニュースで取り上げていた<sup>3</sup>。本調査は、「世界媽祖會北港」という新しい活動の中に、媽祖伝説が如何なる形で組み込まれているかという伝説継承の側面を調査

するとともに、今日的な媽祖信仰の姿をも考察することを目的とし、2013年9月11日～22日の12日間に亘って開催された「世界媽祖會北港」に参加し、その現地調査報告をまとめたものである。

## 1. 北港朝天宮の概要

まず、本廟会を開催した台湾雲林県北港の媽祖廟朝天宮について少し紹介をする。朝天宮は台湾媽祖廟の総本山とされており、利益を祈願して訪れる参拝客の数では台湾最多の廟である。朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』では、「朝天宮は、現在全台湾の媽祖信仰の中心で、人々は一生に少なくとも一度は朝拝したい気持ちを持って」おり、「その信仰圏は台湾全土に及んでいる」としている<sup>4</sup>。その理由のひとつにあげられるのが媽祖神像のもつ靈力・靈験である。媽祖信仰は、湄洲系、泉州系、同安系の三系統が存在していると言われているが、北港朝天宮は、媽祖信仰の源流である福建省莆田市の総本山湄洲祖廟から直接分靈<sup>5</sup>しており、またその建立からすでに300年以上の歴史がある。朱氏によれば、一般的に「大陸から直接分靈、分身<sup>6</sup>してきた媽祖は靈力が高いとみられているが、なかでも湄洲の総本山からの直接の分身は最高の靈力を持ち、更に「同じ大陸からの分身や分靈の媽祖でも、古ければ古いほど、その靈力と地位が高い」と考えられているという<sup>7</sup>。正確な数字は分からないが、1987年の統計調査によれば、台湾全土にはおよそ500余りの媽祖廟があるとされている。その中でも直接湄洲祖廟から分靈し、古い歴史を持った廟は多くない。また、朝天宮から分靈している廟も台湾には20余りあり、そこからさらに再分靈がされている<sup>8</sup>。以上のような背景から、人々は同宮の靈験に期待し、毎年多くの参拝客が訪れるのである。また台湾内の媽祖廟間でも参拝客数をその廟のステータスと見做して競い、大陸の湄洲祖廟といかに関係を持つかが権威付けとなっている。そういったことを考慮すると、今回「世界媽祖會」が「北港」で開催されたこと、そして中国本土の湄洲祖廟、天津天后宮を招いて共催した事も大

きな意味があったと考えられる。

次に、大会に先立って北港朝天宮の外観と廟内部を紹介する。

朝天宮入り口の両脇には獅子が2頭鎮座し、その後方には龍に騎乗した男性の石像が並ぶ。幸いなことに、廟関係者に話を伺う機会を得たので、この石像について質問してみたところ、これが龍王だということが分かった。龍王も媽祖と同様に海の安全を守り、海中の生態系を管理しているが、海に関する神は全般的に媽祖の傘下にあると言う。彼らは媽祖の仕事を補助する役目を果たし、媽祖の命に従うが決して部下というわけではない、との説明であった。一般的に龍王は4人おり、それぞれ東西南北の海域を治めている<sup>9</sup>。中国では唐代以降特に沿岸部地域の人々に篤く信仰されていたが、宋代以降媽祖が現れた後は本来龍王が獲得していた地位は媽祖に取って代わられてしまった。(内陸部では依然龍王の地位が維持されている地域もある。)媽祖と龍王の関係性には様々な説があり、地域によっても異なるため、一括りにはできないのが現状である<sup>10</sup>。

左右にそれぞれ鎮座する獅子と龍王の間を通り抜けると、目の前には色彩豊かに装飾された屋根の朝天宮が現れる。屋根の装飾は左右対称のように見え、計5ヶ所の門が横に整然と並んでいる。屋根瓦の一つ一つの装飾には獅子が刻まれ、その上方には、宝船に乗り込んだ人形が所狭しと飾られている。一見すると仙人の住む仙界、或いは天界のようだが、廟の関係者に聞くと、これは歴史上の人物だと言う。詳しく見てみると、槍を構えた兵士や戦い争う人の姿もそこにあった。中心には3人の人物がおり、それぞれ金銀財宝・子孫繁栄・不老長寿をつかさどる神だと言う。

その中央の門(中門)をくぐったところには千里眼と順風耳が両脇に仁王立ちしている。その上、各1体ずつだけでなく、その後方にもう3体ずつ並べられており、とても威圧的である。千里眼と順風耳と言えば、大抵媽祖の後方か両脇に供として控えており、媽祖と切っても切れない関係にある。通常千里眼は、頭

に2本の角を生やし、緑或いは青色の衣装を身に纏って片手に斧を持ち、もう片方の手を添えて遠くを眺めるポーズをとっており、順風耳は、頭に1本の角を生やし、赤い衣装を身に纏って片手に矛を持ち、耳にもう一方の手の指を入れようとするポーズをとっている。朝天宮にある千里眼と順風耳の像は、祭祀行事の際人形の中に人が入って歩き回ることから非常に簡素な造りであり、これと言ったポーズはとっていないが、廟堂近くの北港観光大橋入り口に構えられた千里眼と順風耳の巨像は、まさに千里眼と順風耳らしい姿で、まるで媽祖廟とその街を警護する守護神のようであった。(以下写真添付)



(上が朝天宮にある千里眼と順風耳で、下が北港観光大橋の入り口に立つ二神。)

彼らは媽祖の守護神とされており、その出生に関する伝説も幾つか存在している。一つは、本来金精と水精であったという伝説、今一つは、商の時代紂王の將軍であった兄高明と弟高覺(高覽と記載する書もある)の靈魂であったとする伝説である。前者は、『天妃顯

聖録』<sup>11</sup>や、顕聖録を元にした『敕封天后志』に記されており、後者は明代万暦年間に記された神魔小説『封神演義』（第90回）に記されているが、いずれも本来は“鬼”と呼ばれる類であった。また、宋の太平興国7年（982）に、湄洲島西北の桃花山に現れて悪さをし、民衆を困らせていたところに媽祖が現れ、戦いに敗れて降伏させられ、それを機に媽祖の助手兼護衛になったとされている<sup>12</sup>。さらに民間では、媽祖を観音菩薩の化身と考える説もあり、そこから千里眼は彼女に代わって世の苦を見るという「観」の役割を、順風耳は人々の叫びの声を聞く「音」の役割を果たし、2人揃って「観音」になるという、ユニークな発想がある<sup>13</sup>。以上のように千里眼と順風耳もまた、様々な伝説の中に生まれ、媽祖の従者として、地位を獲得していきうようになっていったのである。

この二神の間を通り抜けて目の前に広がるのが、媽祖本殿である。先ほど同様、屋根の上には華美な装飾が施されており、頂点には、小さな七重の塔が建てられている。この朝天宮は主に、①媽祖本殿 ②観音佛祖殿 ③三官殿 ④聖父母殿 ⑤文昌殿 ⑥土地公・境主公/福德正神殿からなっており、参拝客は媽祖だけでなく、観音や月下老人、媽祖の父母、福德正神など様々な神を、順に参拝することができる。このように複数の神が合祀されているケースは、多くの廟でよく見られるため驚くことではない。しかし主神の父母までが同じ廟内で、神として祀られている例はあまり聞いたことがなかったため、廟関係者に問うと、「皇帝給媽祖很有特色的一種榮耀，因為皇帝重視她，所以她的爸爸媽媽也一起去褒揚。」（皇帝は媽祖に、特色をもった一種の誉れを与えて下さった。皇帝は媽祖を重視していたため、彼女の両親も共に、称揚したのである。）と回答が返ってきた。つまり媽祖だけでなく、その父母にも功績があるということである。実際のその役割を見てみると、『媽祖信仰』の著者李露露は「大甲鎮就以北港朝天宮為祖廟，讓大甲媽祖回北港朝天宮看望父母，事實上朝天宮的確供奉有媽祖父母的神像。」（大甲鎮は北港朝天宮を祖廟としており、大甲媽祖をその父母に合わせるため、北港朝天宮に帰らせている。

事実、朝天宮には確かに媽祖の父母の神像が合祀されている。）と述べており、北港から分霊された媽祖の、里帰り場所としての役割を担っていることがわかる<sup>14</sup>。

筆者は朝天宮内部を全て回ってみたが、やはり主神である媽祖が圧倒的な人気を誇っていたことは言うまでもない。媽祖本殿の手前では線香を持ちながら熱心に祈っている人や、経を読んでいる人、巨大な賽銭箱に賽銭をする人、占いをする人等が後を絶たなかった。

次に今回初の開催を決定した「世界媽祖會北港」の内容とその特色について、諸資料に基づき紹介する。事前に公表された資料としては、①北港朝天宮のホームページ上に掲載され、随時更新されていた本廟会に関する最新のニュース記事と、②「世界媽祖會北港」の特設ホームページ上に掲載された表演・科儀<sup>15</sup>プログラムである。残念ながら、この特設ページは既に削除されてしまったようだが、幸いな事に、現地で特設ページのプログラムの印刷物を手に入れることができた。12日間（台風の影響で予定が前倒しになった為、正確には9日間）のそれぞれのプログラムを全てここに列挙すると長文になるので、手に入れた印刷物に基づき、中身を要約すると以下ようになる。表演プログラムは各日メインとして「慈惠之夜」（12日）、「兩岸聯歡晚會」（13日）、「朝天宮之夜」（14日）、「火舞豆腐-火棍秀」（15日）、「米斯特不插電」（16・17日）、「笨港合和中秋燈謎晚會」（18日）、「中秋團圓聯歡晚會」（19日）、「HOT SHOCK 嗨翻夜」（20日）、「北港太子電音潮」・「八度音」（21日）、「金氏世界記録」・「千桌福宴」（22日）が予定されていた。それ以外にも、「民俗陣頭匯演」や、体験活動と称して「我也要當三太子」、「保庇平安米」、「神氣八畫臉譜」、そして「日本浴衣小煙花」等のイベントが催された。一方科儀プログラムは、祀宴（媽祖宴）、法會報鼓、そして星真寶懺、朝天謝罪寶懺などの寶懺と北斗經、天上聖母經、東・西斗經、南・中斗經等の読経があった。「北港英雄趣味擲杯大賽」、「美食嘉年華」といった表演プログラムや、体験活動の「我也要當三太子」と「保庇平安米」、そして「祀宴」等の科儀プログラムは毎日行われており、読経も日替わりでほぼ毎日予定されていた。以上が本

廟会期間中の大まかなプログラムである。なお、筆者が9日間中実際に参加できたのは、12・14・16・17・19・20日の6日であった。

また、当日配布された資料としては、③「世界媽祖會北港 湄洲媽祖廟・北港朝天宮・天津天后宮 大会執行企画書」と題されたパンフレットがあり、廟会の主旨や特色、主催機関、執行委員会、活動日程、さらに展示物といった情報が記載されていた。同冊子によると、廟会全体のテーマは“媽祖心、香火情”（媽祖の心、線香の情）で、その主旨を要約すると以下のようである。

「参加するすべての人に廟会の歴史伝承をさらに知ってもらい、歴史人物、民間伝説、民俗、宗教等を融合し、嘉年華会（カーニバル）の形を以て表すことで、伝統芸術にさらなるカタチを増やしてだけでなく、同時に新たな文化創造価値を付与し、中華伝統民俗芸の国際的な可視性を高めていく」。

更に興味深い事に、パンフレット中には、その独自性についても7つの項目を挙げて示している。それによると、本廟会を通して「一、媽祖の聖徳、仁愛、慈悲の精神等を発揚し、二、媽祖を敬拝する全ての民に幸福と恵みが施され、三、「悔い改め・許し・祈り」によって心霊を浄化し、四、万の神が一堂に会して宴を楽しみ、五、新たな形で民俗芸術を解釈し、六、中秋節を記念して交歓の夕べを開き、七、ギネス世界記録に挑戦する」ということである。

また、朝天宮のホームページや「世界媽祖會北港」特設ページとは別に、④ face book 上でも本廟会専用のページを作成し、リアルタイムとまではいかないが、2,3日遅れで廟会の賑わいを映像と記事で伝えていた。同ページ内で9月10日に投稿された「2013 世界媽祖會北港新聞稿」という記事では、北港朝天宮理事長の蔡咏錫のコメントが載せられており、「終於把大陸兩大媽祖同時邀請前來台灣，希望藉這次的活動將媽祖世界和平女神的形象推廣到全世界，讓世界看見台灣最美的宗教文化。……將來有機會一定要把這位女神推向全世界，把其精神與意義宣傳到世界各地。」（大陸の二大媽祖を同時に台湾に招待したので、今回の活動に

よって媽祖を世界平和の女神の形象として全世界に押し広め、世界に台湾の最も美しい宗教文化を見せていきたい。……将来機会があれば必ずこの女神（=媽祖）を全世界にアピールし、その精神と意義を世界各地に伝えていく。）と語っている。彼は「世界媽祖會北港」のタイトルに相応しく、台湾だけにとどまらず、「世界」を視野に入れた今回の廟会であることを強調した。

## 2. 現地調査報告

本章では、「世界媽祖會北港」で実際に筆者が見聞きしてきた事を整理していく。先に述べたように、本廟会は12日間連続して行なわれている。毎日行なわれていたプログラムもあり、特定の日にだけ行なわれていたものもあった。なお、下線を付した箇所が何点かあるが、これは第4章の論証で用いるものであることをあらかじめ明記しておく。

廟会前日、世界各国・台湾各県から参詣団が、自廟の本尊である媽祖神像を朝天宮へ運び入れる作業が進んでいた。北港朝天宮が face book 上に公表した情報によると、今回世界22カ所の国家、及び地域と、台湾国内300カ所以上の神廟から媽祖神像とその他の神像が朝天宮に会したそうである<sup>16</sup>。その多くは、北港朝天宮から分霊した媽祖廟であり、「進香団」という名称の参詣団を結成して詣でに来る。これら各地の進香団は、揃いのユニフォームを着用し（以下写真添付）、太鼓や爆竹を派手に鳴らしながら、本殿へと入り、彼らの運んできた媽祖の神像たちは、次々に奥へ搬入されていく。一方今回の廟会を、「世界媽祖會北港」と題して開催するにも関わらず、第一節で紹介した本廟会の特色にも「四、萬神樂聚聖會共享祀宴，傳承古俗宴神，宴王，宴天之典禮。」とある通り、観音、広恵聖王、濟公活佛等といった媽祖以外の神像も姿を見せており、必ずしも参加した廟の主神が媽祖とは限らないようである。これら媽祖以外の神像を集める点には、何か意義があるのか廟関係者に尋ねたところ、「彼らも神の一種なので、媽祖でなくても神であれば問題は

ない。参拝客も一度にさまざまな神を参拝することができるから丁度良い。」と話していた。実際、媽祖以外の神像を持ってきている進香団の一人にもこの件に関して伺うと、「(媽祖でなくても) 神には変わらないので構わない。自分は媽祖も信じているし、自分たちの祀っている神も信じている。」と話していた。恐らく彼らにとって、それがどの宗教であるか、どんな神であるかという問題はたいして念頭に無いのだろう<sup>17)</sup>。筆者もすでに儒・仏・道教の神々が、己の宗教を越えて合祀されているパターンを、幾つかの廟でも目にしてきた。このように「万の神を迎合する」廟側の姿勢と、「如何なる神であろうとも靈験があれば祈願する」民衆の利益主義的発想から中国・台湾の人々の宗派に囚われない信仰のスタイルが見られたのである。



(泰国南瑶媽祖宮、即ちタイの進香団。)

廟会当日は、前日同様途絶えることなく、各地から数多くの媽祖神像や、その他の神像が運ばれてきたが、今度は前日媽祖本殿のガラス内に安置した媽祖神像たちを、ガラス窓から出して手前に並べ、廟関係者或いは進香団の人々が、1人1体ずつ廟の外に持ちだし始めた。街中を媽祖の行列が行脚しているのだらうと予測し、その後を追ったところ、行列の終点は意外にも「世界媽祖會北港」用の特設会場であった。入口には「2013 世界媽祖會北港」と書かれた大きな門が構えられ、そこをくぐりぬけると宏大な広場が目の前に広がる。広場の両側には、幾つかの仮設テントが張られ、来賓やアナウンス、パンフレット配布など各ブースに分かれているようだった。その広場の先に、世界

各地からきた媽祖や、その他の神の神像が祀られた特設祭壇が設けられているのである。湄洲祖廟の媽祖神像を中心に安置して祀り、その後方や両脇には、道教の神々の描かれた垂れ幕が、壁に掛けられている。更に、その湄洲祖廟の媽祖が祀られている祭壇の両側には、テーブルが一面敷き詰めたように並べられ、そこに各地から運ばれてきた神像が安置されている。特設祭壇には月餅や菓子、果物の盛り合わせなどの供物や献花が所狭しと並べられ、人々が次々にやって来ては本殿の前で参拝をしていた。また祭壇の前方では、少女少女達による獅子舞や円舞が披露され、祭祀の儀式に花を添えていた。更に中国お馴染みの伝統演目以外にマーチングバンドの行進といった非常に現代的かつ欧米的な演目も見られた。



(上：湄洲祖廟の進香団の後について行った。あまりにも激しい爆竹に迎りが真っ白になり、目を擦る姿も。下：「世界媽祖會北港」特設会場の門がまえ。)

このように、媽祖を祀る祭壇が築かれた広場と道路を挟んだ対面には、また別の会場が設置されていた。

清涼飲料や氷菓子などを販売した出店が立ち並び、その奥には仮設舞台が作られて、様々な催し物が予定されていた。筆者が見学に行った際は、「北港英雄趣味擲杯大賽」なるイベントが開かれていた。女性が台湾語で司会進行を務め、幾人か壇上に上がって自己紹介をしていく。それからポエを1人ずつ投げ始めた。

ポエ（筊、或いは杯）とは中国・台湾の占いの一種（ポエを投げて占う事を擲筊や跋杯と書き、同イベント名では「擲杯」と表記している。）で、よく廟や道観に訪れる参拝者が神からのお告げを求めて行っている。少しふくらんだ片面（陽）と、平らな片面（陰）の2面をもち、三日月形をしたポエ一対を投げることによって神意を占うのである。地面に落ちた2つのポエが両方とも陰なら「伏筊」（カツポエ）といって神が怒っている証拠で、両方とも陽なら「笑筊」（チヨポエ）といって神に嘲笑されていることを表わしており、いずれにしても神意に反する。2つのポエが陰と陽に揃えば、それを「聖筊」（シンポエ）と言って、神からの許諾が下りたことになるのである。ここでは1人につき3回投げられることを許され、何回シンポエを出せるかどうかを競っていたが、筆者が見た際は、候補者誰1人としてシンポエを出すことはできず、イベントはものの10分ほどで終了してしまった。この「北港英雄趣味擲杯大賽」は21日までに計30回に渡って予定されており、22日に勝者が発表されることになっていたが、台風の影響でスケジュールが入り乱れ、中には執り行われなかった行事もあるため、このイベントが最後まで行われたのか確認することはできなかった。

12日間様々なプログラムが予定されている中で、読経は毎日のように行われていた儀式のひとつである。道教の陰陽マークが刺繍されたきらびやかな道服を身に纏った道士が、本拠地湄洲島から運んできた媽祖神像の前で木魚を叩きながら、まるで歌うように読経するのが特徴的である。「世界媽祖會北港」特設webページに掲載されたプログラムには、何種類かの経文名が記されていたが、その中には「天上聖母經」もあった。

ただし、一般的に天上聖母經と呼ばれる経文にはいくつか種類がある。当日読経に用いられたのは、僧侶が撰述した經典を目前で道士が読んでいるのは、些か不思議な光景であったが、道士たちの読経の後方では信者たちが手を合わせて熱心に参拝したのち、叩頭の礼（頭を床につける）を何度か繰り返していた。

しかしながら、道士の真後ろで参拝する信者たちの多くは、進香団らが着ている揃いのユニフォームを着用していたため、一般の人、つまり観光や見物で来た客たちは、あまりこのように奥まで入って参拝しないようであった。通常はもっと手前の、舞台全体が見える線香台の前方付近で参拝して立ち去る人が多いように思われる。

道士は一段落すると、今度は立って経を読み始めた。待機していた演奏家達が読経と共に宗教音楽を奏でる。それから道士が教典と思しき書を手に持ち四方に一礼し、それに合わせて信者も参拝する。最後に手拍子を二拍、これで終了である。この一連の流れは正味30分ほどであった。天上聖母經が詠まれている間、熱心な信者以外は入れ替わり立ち替わり、見学をしたり、隅の方と一緒に参拝したり、写真を撮ったりと、とても自由な雰囲気であり、同時に祭壇の中と外で信仰の温度差があることを感じた。

本廟会の期間中、筆者が特に興味を抱いていたのは中秋節であった。中秋節は中国・台湾両岸の人々にとって春節と同様重要な節句の一つであり、普段離れて暮らす人々も、この日は実家に帰省し、家族皆が一堂に会して一家団欒の時間を過ごす。「世界媽祖會北港」のface book上にも、中秋節に関してこのような投稿がされていた。「這次盛會以媽祖和萬神匯聚大團圓為活動主題，活動全程也正好碰上中秋節，不僅是中秋月圓人團圓，連神明也一起在北港團圓，相當別出心裁，也具有特別意義。」（今回の盛会は、媽祖と萬の神が集まって団欒することを活動の主題としており、活動スケジュールもまたちょうど中秋節にあたっている。中秋の名月に一家団欒するだけでなく、神々も共に北

港にて団欒することは、非常に格別であり、特別な意義を持っている。) この文面からでは、本廟会が意図的に中秋節の期間に開催したかどうか明確に判断することはできないが、少なくとも中秋節における人々と神々との団欒を強調しているのは明らかである。

『媽祖 信仰的追尋』の著者張珣によれば、媽祖の「回娘家」<sup>19</sup>にかこつけて、多くの異なる地域社会が擬制の親族関係でつながるとしており、中心地とされる媽祖廟（湄洲や北港）に里帰りすることは、台湾全土、ひいては中国全土の媽祖信徒と非信徒までもが一つの信仰、及び文化のネットワーク体系で結びつくことになる<sup>20</sup>。

今回「世界媽祖會北港」が媽祖の生誕祭ではなく、中秋節に行われたのも、本廟会を通じて両岸のみならず、世界各地に散らばった媽祖神像とその信徒たちが、台湾媽祖廟の中心ともいえる北港に“里帰り”し、一家団欒の時間を過ごすことで、中国人の理想である「海内外一家親」（国内外の皆が家族のように親しい）を実現する意図が込められていると推測される。

中秋節のこの日、やはりそれまでの日とはうってかわって大混雑、大賑わいの顔をみせた。若い人たちも多く、まるで恋人同士や親子連れが夏祭りの縁日を楽しんでいるかのような雰囲気であった。媽祖像の祀られた本殿のある広場には、新たに巨大な特設舞台が設けられ、テレビ局も待機していた。媽祖が祀られた広場の向かいにある仮設会場では19時まで途切れることなくショーが行われており、それを見に向かう人も多く見受けられた。筆者は途中から見学していたが、太鼓・獅子舞・歌・手品・少林寺などが晩会の前まで続けて披露され、人々を楽しませていた。しかしここで筆者が違和感を覚えたのは、演目に媽祖とかかわりのあるものが全くないということである。司会者が極たまに媽祖と絡めて司会進行をするだけで、具体的に媽祖自体の伝説や事績について触れることはほとんどなかった。世界中から媽祖が結集する比較的大きな廟会であり、パンフレットの活動内容には「藝術傳承」（芸術伝承）や「民俗技藝團體匯演」（民俗技芸団体合同公演）なるものが記載されていたため、筆者は戯曲

等の媽祖伝説に関係する演目があると予測していたが、実際廟会で行われるプログラムはその予想とは相反するものばかりであった。獅子舞や民謡等はこういった祭祀行事ではよくみられる演目であり、少林寺も中国の伝統武術であるため、廟会で披露される演目として皆目理解ができないわけではないが、タキシードに身を包み、ホイッスルを鳴らしながら行われたマジックショーは実に現代的で異質な存在に感じた。

それらの演目をしばらく見た後再び例の巨大な特設舞台を見に戻ると、媽祖本殿の屋根に飾られた媽祖像と修飾品が無数の電球で鮮やかに彩られ、煌煌と輝いていた。この日のメインイベントである「中秋團圓聯歡晚會」（中秋団欒交歓の夕べ）がもう間もなく始まろうとしており、18時40分にはすでに生中継の準備は万端であった。時計の針が19時を指したちょうどその瞬間、ドライアイスの煙とライトアップの演出のもと、司会進行役の男女が登場し会場を盛り上げていく。北港朝天宮理事長、湄洲島媽祖廟理事長、北港鎮長の順で前に出てきて挨拶をし、巨大な月餅を披露、ケーキカットならぬ月餅カットが3人によってなされ、後に集まった人々に配られる。その後本格的にショーが始まり、若手男性ユニットの軽快な音楽に続いて女性のソロ歌手、演歌歌手、京劇歌手、男女デュエット…とここまで視聴したところで筆者は最終バスの時間もあり、その場を離れることを余儀なくされた。後日北港朝天宮のホームページにて確認したところ、今回は以下の出演者たちを招いていたということである。

表演來賓（出演者）：大陸天津國家一級演員趙靖  
京劇，浩角翔起、黃妃、王瑞霞、戴愛玲、施文彬、  
品冠、張天傑<sup>21</sup>

上記には京劇とあるが、実際に劇団員が登場して芝居をやったわけではなく、女性歌手一人がステージに立ち、京劇の曲を2、3曲歌っただけである。今回晩会で披露されたのは全て歌であり、しかも古来親しまれてきた伝統的なものよりは、今自分がリリースしている歌や自分のヒット曲などを媽祖と絡ませた形で紹



介していた。以下は、筆者が当日ビデオカメラで撮影した映像を基に、その時の司会と歌手のやり取りの一部を書き取ったものである。

(司会との会話の中で歌手の二人が北港に良く来るということから…)

歌手 A：其實媽祖婆對我們來講就好像自己的一個長輩一樣，因為我們常常出外景，那要飛機飛來飛去，一要出國趕快要去拜媽祖。

(実は媽祖は私たちにとって人生の先輩のような存在なんです。よくロケに行くので、飛行機で行ったり来たりしますが、出国するとなったら真っ先に媽祖を拜みに行きます。)

歌手 B：真的！（そうそう！）

歌手 A：請媽祖婆保佑。那么如果在外面晚上睡覺，覺得怪怪的話，就會說「噢！媽祖～叫不要亂了啦！媽祖婆！」…所以感謝媽祖婆對我包庇。  
(媽祖に守ってもらおうよう祈ります。それでもし外で夜寝ていて奇妙な感じがしたら、こう言います。「お！媽祖様～奴らに悪さをさせないください！媽祖様！」…だから媽祖には守ってもらって感謝しています。)

司 会：那 B 呢？（では B さんは？）

歌手 B：我想北港這個地方，我們說實在的一些外景節目還滿常來的，也感受到大家的熱情，尤其是今天像這樣一個盛會，我們說是兩岸的所有的朋友，一家親嗎，大家一起來這邊拜媽祖，所以我在這邊也要祝福所有的朋友，平安，健康，還有佳節快樂。  
(この北港というところには本当にロケでしょっちゅう来るんですね、(だから)みなさんの熱意を感じるし、特に今日はこのような盛大な会ですからね。兩岸の全ての人々は皆家族のようなものじゃないですか。皆がここに来て共に媽祖を参拝しているので、私もここで皆さんの平安と健康、そして中秋節を楽しく過ごせるようお祈りします。)

司 会：那意義很深，因為你們兩個非常的相信媽祖娘娘，都很虔誠，也都會去拜拜，今天是「世

界媽祖會北港」，你一次就看到所有的媽祖 fans，多開心啊。

(いやあ、とても意義深いですね、だってお二人は媽祖を篤く信じていて、とても敬虔で、参拝にいらっしゃっているんですよ。今日は「世界媽祖會北港」なので、一度にすべての媽祖ファンに会えますよ。最高でしょう。)

……中略……

司 会：接下來帶來什麼好聽的歌曲？

(それでは次はどんな素敵な曲を披露してくれるんでしょう？)

歌手 B：因為今天算是媽祖高峰會，所有的媽祖 fans 在這邊，浩角翔起要帶來一首「謝謝你」，謝謝媽祖保佑我們，謝謝大家。

(今日は私たち媽祖のサミットですから、すべての媽祖ファンがここにあります。浩角翔起(グループ名)は「ありがとう」を届けます。媽祖様、私たちを守ってくれてありがとう、ありがとうみんな。)

歌手 A：所以這首歌是「謝謝你」。

(だからこの歌は「ありがとう」)

このように、全く媽祖と関係ないと思われるような曲であっても、会話の中でうまく媽祖と絡め、さらに自分たちの信仰告白もしながら会を進行させていくのである。今回取り上げた会話は、トップバッターの男性ユニットと司会とのやり取りであったが、それ以降の殆ど全ての歌手が彼ら同様に媽祖を信じている、参拝に行くと公言しており、どれも媽祖を身近な存在に捉える発言ばかりであった。



(上：トップバッターの男性ユニット。以上の会話は、この2人と司会者によるものである。下：天津出身の京劇歌手)

更に最終日、特別ステージはすでに消え、代わりにあたり一面にテントが張られ、その下にはずらりとテーブルが並べられていた。各テーブルには今回「世界媽祖會北港」に参加した廟のネームプレートがおかれ、進香団の人々がすでに座っていた。会場は人であふれかえり、入り口ではセキュリティーチェックを受けるほどである。本来ならこれらのプログラムは当初予定されていた最終日22日に行う予定であったが、台風接近に伴い予定を早め、20日に最終日のプログラムを行なう事になった。この日のメインは何と言っても「金氏世界記録」(ギネス世界記録)である。世界各地から集められた媽祖神像を筆頭とする神仏像の数でギネス記録に挑戦し、4,643体と世界最多記録が打ち立てられた。このプログラムに如何に力を入れたかは第3章で触れることとする。午後1時過ぎにはすべてのプログラムが終了し、「世界媽祖會北港」の為に各地からやってきた媽祖神像は次々に会場の外

へと運ばれていき、各廟の進香団と共に足早にそれぞれの廟へと帰って行った。

朝天宮のホームページによると、9月21日(土)も午後1時30分から済度儀式を行ない、済度後は、朝天宮の媽祖神像およびまだ自廟に戻っていない神像を小学校に避難させる作業が行われ、本来最終日として設定されていた9月22日(日)には、朝天宮の媽祖神像を本殿に運び戻して安置し、9月23日(月)には、湄洲祖廟の媽祖と、天津天后宮の媽祖の見送りが予定されていた<sup>22</sup>。当日は、台風の影響でバスが運行中止、バス以外の交通機関にも支障が出ていたため、筆者が実際にこの目で確かめることは出来なかったが、後に北港朝天宮のホームページにて、その様子が確認できた<sup>23</sup>。

以上が、今回筆者が現地調査した「世界媽祖會北港」の内容である。旧正月や生誕祭等季節ごとの大祭には、しばしば廟内で布袋戲や歌仔戲といった演劇の催し物が行なわれるので、個人的には非常に期待していたのだが、今回のプログラム中にはそうした行事は一切含まれていなかった。また、台風の影響により予定されていたプログラムの一部が中止、或いは変更されたことも残念であったが、この廟会を通して現代における媽祖信仰の姿を垣間見ることができたのは、大きな収穫であった。

次に、今回見聞してきたものを踏まえて、本廟会開催の目的とその背景を分析する。



(千桌福宴の様子。広場全体にこのようなテントとテーブルが設置されていた。)



(ギネス世界記録の特大大パネル。認定員等が署名する箇所も。)

### 3. 「世界媽祖會北港」の目的とその背景

本廟会について考察を加える際、踏まえておかなければいけない前提として、「世界媽祖會北港」が

- (1) 今年初めて開催された廟会であるということ
- (2) 台湾内部だけでなく中国大陸や海外の媽祖廟、及びその他の諸神廟も招致しており、通常の廟会より国際的な色彩が強いこと

の二点がある。

(2) に関しては、海外の媽祖廟と書いたが、具体的には日本、アメリカ、フランス、アフリカ、オーストラリア、サウジアラビア等に分霊された媽祖像が集った。筆者が廟会前日に朝天宮を訪問した際には、ちょうどタイの媽祖が運ばれて来たところに遭遇した。運んできた進香団の構成員は、殆ど中国人或いは台湾人であった。海外の媽祖といっても大抵その信者は各国に移住した華人達であるがため、今回世界各地から媽祖を運び、参拝するために集まってきたのもやはり華人が殆どであろう。

そうは言っても黒人がアフリカの原住民族のような格好をして、歌いながら民族舞踊を披露したり、独特の楽器を用いて演奏したりする姿や、浴衣姿で現れる日本人、北港まで観光に来る欧米人の姿はやはり新鮮であり、通常の廟会より“世界”を匂わせる要素の一つであったと感じた。加えて、廟会のプログラムには、体験活動の一つとして「日本浴衣小煙花」(日本浴衣

花火企画)も用意されており、主催側も意識的に異文化交流を推奨している姿勢が窺えた。また、今回ギネス世界記録に挑戦することに関して、北港朝天宮の理事長は、中天電視(テレビ局)のニュースメディアに対して「朝天宮要挑戰金氏世界紀錄，就是說萬神祈福。美國有自由女神，但是我們的媽祖將會成為世界和平女神，希望大家所有的友宮，不管什麼神，所有的善心大德，共同來共襄盛舉。」(朝天宮がギネス世界記録に挑戦するのは、まさに萬の神々に來福を祈念することにある。アメリカには自由の女神がいるが、我々の媽祖は世界平和の女神となるだろう。すべての廟は如何なる神であろうとも、善の心と高德を備えていれば皆來て共に盛大に祀ろう。)と答えており、ギネス挑戦の意義は、「萬神祈福」にあるとしている。このように、「世界の媽祖」を意識しての開催であることは彼の発言に明らかであり、ドメスティックな活動というよりは、より對外アピールに力を入れたものであることは明白である。また、アメリカの自由の女神と対比していることも、媽祖の名を平和の女神として世界的に広めていきたいという強い願いが現れている。

先に述べたように、本廟会のメインイベントの一つとしてギネス世界記録に挑戦することを大々的に宣伝していた。認定に際しては、わざわざ海外のギネス認定員を北港に招致し、その場で認定式まで行なった。

参考までにギネスワールドレコーズジャパンが規定している認定員の立ち会い費は以下である<sup>25</sup>。

[事前相談+1日立ち会い(認定)]=100万円+渡航費/宿泊費/滞在中の食費等実費]

「世界媽祖會北港」の開催にはテレビ局や新聞社などメディアを始めとして数多くの企業がスポンサーになっているが、それにしても全体にかかる費用を考えれば、そう容易に捻出できる金額ではないだろう。本廟会の資金面に関して、8月に北港朝天宮の理事長がface bookの特設ページで触れているが、朝天宮は活動経費に捻出する金額を一千萬元までと決めており、廟側から余りに膨大な経費を出す事はしたくないとし

ている<sup>26</sup>。その上で、媽祖信徒たちからの資金(寄付金)を求め、皆で媽祖を崇高な地位に高め、世界に広めていこう!と呼びかけている。このように、今回の開催において、朝天宮側はギネスの件も含めて多額の経費がかかる事を予測しており、インターネットという媒体をも用いて信者からの寄付を募っていた。

しかしながら、ギネス世界記録への挑戦は、出費源であると同時に、本活動を宣伝するには非常に都合のいい催し物であったと考えられる。前出の張珣によれば、台湾媽祖廟がメディア報道を利用し、同時に廟の宣伝をする傾向は、ここ二十数年の間見られ、その規模は徐々に大きくなっているという<sup>27</sup>。本廟会でも、中秋節に行なわれた「中秋團圓聯歡晚會」が生中継で報道されていた他、ギネス世界記録の認定式では数多くのメディア関係者たちが最前列を陣取ってカメラを回していた。更に、「世界」の媽祖会であることから、特に海外からの訪問者達は宣伝に好都合であり、筆者も日本語でノートを取っていたところ、声をかけられ取材を受ける場面があった。したがって、今回の廟会もまた、メディアを通して朝天宮を大々的にアピールできる絶好のチャンスであったと考えられる。

宣伝によって獲得できるのは、企業スポンサーだけではない。6月の時点で記者会見を開いていた事はすでに述べたが、これによって台湾全土、ひいては筆者のように海外から来る観光客をも獲得できたのである。そしてより多くの観光客が北港に足を運べば、当然朝天宮の周辺地域の商売にも活気がつく。実際朝天宮周辺には土産店や飲食店等が乱立しており、今回の廟会でもそれらの店を載せた周辺マップを配布していた。

更に朝天宮は本廟会ではもちろんの事、宗教行事を行うたびに、台湾副総統や北港鎮の鎮長、政治関係者等を来賓として招待している。朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』の中では、廟の企業的側面と政治的な利用価値について、「四十年来、台湾当局は媽祖信仰に対して、露骨な利用政策はとっていないが、実は政府の高官、地方長官、議員たちの個人的信望を高めるために利用されている。その反面、媽祖信仰の側もそれによって、廟の知名度を高め、信者の増加、香客と遊

覧者の引き寄せなどを謀っている。廟建設の準備、祭典の挙行などに、政府の役人や議員がつねに重要な役についていた」<sup>28</sup>ことや、「高官や議員も、参拝、祭典、廟の修理、建設などに参加することによって、広大な媽祖信者の歓心を買ひ、選挙や施政に利用している」<sup>29</sup>こと等を指摘している。今回の廟会でも、重要な場面においては、必ず政治関係者が前に出てきて挨拶をしていた。つまり、廟会一つをとってもそれはもはや単なる宗教行事ではなく、その裏には政治的な駆け引きと企業経営化した廟の思惑が隠されているのである。

以上のことから、「世界媽祖會北港」開催における今回の目的をまとめると、幾つかの項目を挙げることができる。

- (1) 兩岸・世界に散らばる華人の団結の強化
- (2) 媽祖認知度の世界レベルでの拡大
- (3) 兩岸をはじめとする世界各国の文化交流
- (4) メディアによる廟の知名度向上
- (5) 観光客増加と地域の活性化
- (6) 政府関係者とのコネクション強化

ここに挙げた目的は、当然のことながら毎年行われている生誕祭等の廟会にもあてはまる部分があろう。しかしながら今回の廟会は、当初からその開催の目的を、敢えて通常のそれとは異なるものとしているようにみえる。それゆえ、本論は対象を今回の「世界媽祖會北港」に限定し、分析していくこととしたい。

#### 4. 本廟会にみえるイベント性

続いて、本廟会で目にした媽祖信仰(或いはその他の信仰も含めて)にかかわる宗教行事の現代的な側面について論じる。あらかじめ調査報告で、関わりのある部分に関しては下線を付しておいた。

廟会の活動内容は、大きく二つに分類することができる。一つは、読経や祀宴と言った本殿の中で行われる祭祀儀礼(科儀)、もう一つは、特設舞台で催され

る「北港英雄趣味擲杯大賽」や「中秋團圓聯歡晚會」といった催し物（表演）である。またその他にも、体験活動が用意され、祭りの際によく登場する、三太子の人形を自分も被ることができるほか、「臉譜」といって、京劇などの中国古典劇でよく施されている化粧方法を、自らの顔面で体験するものもあった。今回筆者が見た限りでは、祭祀儀礼に関しては古典的な形を貫いていたように思うが、催し物の方面においては中華の伝統文化とは言い難いようなものもあり、廟会の現代的な側面をみることができた。3章まで、現地調査に加え、主催者側の発言や先行研究等引用しながら報告してきたが、総じて言える事は、「世界媽祖會北港」が、本質的に宗教的な敬虔さを求めるような性質をもった会では無く、むしろ媽祖信仰を契機とした一種のイベントとして造られた活動であるということである。本章では「世界媽祖會北港」のイベント性について、筆者が特に注目した点を以下項目に分けて論じていく。

#### (1) 建物や車の華やかな装飾

荘重で伝統美きわまる廟の外観も、日が落ちて辺りが暗くなると、日中とはまた異なる新たな顔を見せる。廟の色彩豊かな屋根は、何千何万という電球に全体が覆われ、夜になるとまるで欧米のクリスマスイルミネーションのような装飾によって、廟から遠く離れた場所でもその外観が一目瞭然となる。日中は全く気付かなかったが、屋根瓦の下方には電光掲示板が取り付けられ、文字が点滅したりスクロールしたりしていた。廟だけではない。今回「世界媽祖會北港」開催用に設置された特設会場はさらに華やかで、過剰装飾ともいえるほど電飾されており、その賑わいは日中より、むしろ夜の方が過熱していたように見受けられた。通常の廟会でもよく現れる、「電子花車」というトラックを改造して舞台をつけ、華美に電飾した山車も街をパレードしていた。この電子花車は、冠婚葬祭等にもよく呼ばれるもので、当初は楽曲の演奏が主流であったが、徐々に女性のストリップやポールダンスが行われるようになり、地方によっては女性が全裸で踊ることもあ

るといふ。さらにその日、特設会場ではアニメキャラクターやマスコットの装飾が全面に施され、トラックを開けたところにオーディオを積んで、ポップミュージックを大音量で流す改造車も登場した。これらのものは、けして伝統的とはいえない、現代的な要素を多分に含んでいる。今回に限らず、また北港朝天宮だけでなく、その他の廟でも以前から電飾を施すことはしていたと思うが、このような装飾は祭祀行事を行なうにつれて、近年さらに派手になっているのではないだろうか。観光地化や廟同士の競争といった点からも、外装により一層力を入れるようになり、豪勢なイルミネーションが出現するようになったと考えられる。



(キャラクターがプリントされた改造車。派手に電飾されたオーディオを積んでいる。)

#### (2) 外国文化の混在

媽祖殿の前で捧げる獅子舞や美女たちの円舞の中で、とりわけ目を引いたのが、マーチングバンドの行進であった。白を基調としたさわやかな衣装を身に纏い、足並みをそろえて媽祖の前まで行進し、会場をぐるりと一周していく。基本的に廟会で披露されるものは、多くが獅子舞や舞踊、楽器の演奏等であったが、マーチングバンドは西洋的な規律と秩序を表現しており、中国伝統芸術とは異質なものを感じさせた。また、中秋節のステージ演目に含まれていたマジックショーも、マーチングバンド同様、他の獅子舞や太鼓、少林寺と言った演目とは明らかに性質の異なるものである。

マーチングバンドやマジックショーは、今日世界中のイベントで定番になっているし、それは台湾でも例外ではないだろう。ましてや、「世界」を銘打った今回の廟会でこういった外来要素を持った演目が見られることは、当然の成り行きと言っても良い。中華以外の要素を含ませることで、国際交流ないしグローバルな色彩を出したいという思惑が、今回の廟会の随所にあったことはすでに指摘している通りである。

### (3) 伝統的な宗教文化の変容

#### パターン1：サブカルチャーとの融合

媽祖殿で道士が経を挙げている一方、向かい側の特設舞台では、軽快なビート音に合わせて赤・金・肌色等の顔色をした「電音三太子」が踊りながら現れる。三太子とは、哪吒或いは哪吒太子、哪吒三太子と呼ばれる道教の少年神で、元はインド神話のナラクーバラを前身としているが、中国では、『封神演義』『西遊記』等の民間説話や小説にもよく登場し、すでに廟会でも三太子の被り物はお馴染みの存在となっている。風火二輪という二個の車輪の形をした乗り物を操り、素早く移動することから、トラックやバスの運転手の信仰を集める歴とした「神」であるが、少年神ということもありその面持ちは幼く、廟会に現れた三太子達は、時に鼻を穿ったりピースサインをしたりと少年らしい姿を演出する一面もあった。

さて、そのような三太子が一体どのように踊るのかというと、主に少年ないし青年が、頭から体まで全身がつながった総重量 20kg 余りの被り衣装を着て、電子楽器を使ったテクノポップを始めとするポピュラー音楽に合わせて、決まったステップを踏んでいくのである。このように、現代電子音楽と伝統的な三太子を融合させたものを「電音三太子」と呼ぶ。当初は、「電音三太子」の登場に眉をひそめる者も多くいたが、彼らの踊りが YouTube 等の動画サイトにアップロードされ、万民の目に触れるようになると、その奇抜なスタイルが人々の興味関心

を買い、次第に廟会のみならず、様々なイベントにも呼ばれるようになっていった。今回の廟会では 3, 4 曲を編集してつなげ、約 10 分程度三太子たちは踊り続けており、最後の曲には去年一世を風靡し、欧米各国のチャートランキング 1 位に輝いた「江南スタイル」という韓国歌手の歌が採用されていた。中華の伝統文芸であり、信仰の対象でもある三太子と、韓国の江南地域をラップ調に歌った「江南スタイル」の組み合わせには筆者も驚いたが、これもまた万民に受け入れられるため変化した、伝統のあり方の一つを呈していると考えられる。

また、このように若者のサブカルチャーと伝統文化が融合するに至ったのには、廟が若者のたまり場となっている事も背景の一つにあるのではないだろうか。筆者が今回獅子舞や舞踊を披露していた若者にインタビューを試みたい旨を台湾人の友人に相談したところ、廟に集う若者の多くは学校に行きたくない、或いは経済的・精神的問題を抱えて学校に通えない子どもたちであり、あまり関わらない方が無難だと助言された<sup>39</sup>。彼らは廟に集まって来て、所謂奉仕活動をする代わりに、廟に自分の居場所を確保していくという。そのように、廟に若者たちが出入りすることにより、同時にサブカルチャーもまた自然と取りこまれるようになり、祭りの担い手でもある彼らによって、伝統と宗教が現代的なスタイルにアレンジされていったものとみられる。

#### パターン2：見せ物としての宗教実践

パターン1では、伝統的な宗教文化と現代文化の融合について論じたが、もうひとつの変容パターンとして、普段人々が宗教実践として行なう祈祷や占い、読経等を、大衆の前で一種の見せ物として行なっていることが挙げられる。廟会期間中においては、毎日行われていた「北港英雄趣味擲杯大賽」がそれにあたる事例である。廟では日常的に、人々が熱心に黙々とボエを投げている姿をよく見かける。この神に尋ねる行為であるボアボエ（擲杯）は、非常に個人的な宗教実践であり、本来は神と一対一で対話

をしながら、答えが出るまで何度も繰り返し行うものなので、誰かが見て楽しんだり、他人と一緒に行動したりするものではない。しかしながら同イベントは、公衆の面前で実に開放的な形で披露されており、投げる回数を制限した上で、景品をかけて神の御旨を争い得ることを目的としている。このように、「北港英雄趣味擲杯大賽」はその名の通り大会であって、もはや宗教的な要素を含まず、誰が見ても理解し楽しめる見せ物としての娯楽活動へと変質化させたものである。

以上、大きく3つの項目に分けて、今回の「世界媽祖會北港」を通して筆者が感じた廟会のイベント性について論じてきた。上述した通り、今回は土着的色彩の濃い地方の廟会等で、しばしば催される戯曲を含めた様々な演芸を目にできなかったことは残念であったが、代わりに、現代的だがどこか台湾古来の良さと伝統を感じさせる種々の文化芸術に触れることができたことは、また一つの貴重な体験であった。

先に挙げた例（電音三太子や花車等）は、「世界媽祖會北港」に限ったものではなく、近年様々な廟会や催し物で目にする存在である。今回の廟会でも、イベントの盛り上げ役になると同時に、“媽祖の世界化”を目指した活動として外部向けに用意された意図も少なからずあると思われる。また、朝天宮自体が観光地化されている事もあり、観光客の目も配慮した上で、一般的に広く受け入れられる娯楽的な活動内容に取って作り変えている部分もあるのだろう。そして、伝統の中に現代的な様式を取り入れることで、若者たちも積極的に関わっていけるよう考慮している事が推測される。

また、今回筆者はこの目で直接媽祖伝説に関する戯曲や催し物等を見る事は出来なかったが、後に大陸中国のニュースサイトにて以下の記事<sup>31</sup>と実際の映像<sup>32</sup>を見つけ、鑑賞することができた。

9月13日晚,北港举行两岸联欢晚会,以“湄洲之夜”

为主题,湄洲天后艺术团表演了《湄洲妈祖》、《两岸一家亲》、《海上女神》等节目,并用莆田特色的“十音八乐”演绎和传唱妈祖生平事迹。

(9月13日の晩、北港では兩岸交歓の夕べが開催され、“湄洲の夜”を主題として、湄洲天后芸術団が「湄洲媽祖」「兩岸家族」「海上の女神」等の演目を披露した。更に、莆田特色の“十音八楽”の演奏と媽祖生涯の事蹟を伝唱した。)

つまり、全く媽祖伝説と無縁な演目だけではなかったのである。楽団の演奏と歌は、京劇等によく見聞きするものに類似しており、まるで戯曲から劇団員を抜いて、音楽と歌だけを残した形のようにだった。歌は筆者には全く聞き取ることができなかったため、台湾人の友人に依頼したところ、彼女も聞き取ることができなかった。この団体は湄洲の「天后芸術団」であり、恐らく湄洲方言で歌っていたので、その場にいた台湾人は殆ど理解できていなかったのではないだろうか。また舞踊では、海を表現した女性十数名の中に、提灯を持った媽祖を象徴する赤い衣の女性が現れたり、“媽祖頭”（媽祖髻）或いは“帆船頭”と呼ばれる船の帆の形をした髪型の女性らが、花形の盆を持って踊っており、その姿は優雅さに溢れ、媽祖の“海上の女神”としての慈悲と気品を現わしているようであった。

このように、今回媽祖伝説に関連する戯曲等は演じられていなかったものの、演目の中には、媽祖の事蹟を題材にしたものも少なからずあったということを通じておこななければならない。そしてそれは、長時間かけて伝説の一つ一つを台詞や仕草、舞踊等で表現していく戯劇とは異なり、たとえ媽祖伝説を知らない人や、台湾語が分からない外国人であっても、短時間で視覚的に媽祖の姿を捉えることができるよう工夫された、現代的な伝説継承の形であると言っても良いのではないだろうか。このような自由なスタイルによって、媽祖の伝説が今日まで継承され、幅広く受け入れられてきた事もまた事実である。

## おわりに

今回筆者が調査に赴いた「世界媽祖會北港」は、地域性や土俗性といった要素が非常に薄く、代わって現代的な様相を呈していた。このような現象が信仰の対象や地域、或いは廟の知名度や方針、系統に直接的に起因しているかどうかは今後の課題であるが、媽祖が当初海運業や漁業に従事する人々に篤く信奉された海運安寧の神であるが故に、他の行業神たちとは異なる、「世界」を意識した対外的な広がりを見せているという事も大いに考えられる。

というのも、古来より今日まで、海は全世界を結びつける大きな役割を果たし、人種を問わず万民に必要な水を絶えず提供してきた。その海を司る神であるならば、地方神としてとどまることなく、中国と交易のある外国との経緯<sup>33</sup>が伝説に付与されることも大いにあり得るし、そこから廟会に異国文化が混じる事も全くないという訳では無いだろう。ましてや媽祖は、海運が盛んになり始めた宋代に沿岸地域を発祥として生まれた神であり、華僑や商人等の移動によって各地に伝播し、信仰されるようになった。故に、そのような時代背景をもった「海運安寧の女神」である以上、外界との接触は避けられないのである。

今回の廟会において、伝統に固執することなく、多分に現代的な要素を取り入れた事や、対外的に強く意

識した内容であった事も、海神媽祖においてはある意味必然的であったとも言えよう。

また、大陸中国では近年道徳や宗教が急速に注目を浴びるようになってきているという<sup>34</sup>。文化大革命時には、宗教は人の心を惑わすものだとして様々な宗教施設を破壊・弾圧し、共産党は無神論を基本理念に掲げてきた。しかし貧富の差が広がり、汚職や腐敗が後を絶たない今、中国人の心の原点を見つめなおそうと、儒教が改めて見直されている。ここ数年、儒教学校の設立や儒教の教えを経営方針に掲げる企業も続出しているという。同時にキリスト教の地下教会も増え続け、クリスチャン人口は現在すでに1億人に達していると予測されている。更にあれほどまで宗教弾圧をしていた共産党も、今日に至ってはそれすらうまく利用しようと考え、黙認する場面さえある。このように、中国の人々の間で宗教に心の拠り所を求めようとする動きがみられるのである。

一方、大陸中国とは全く異なった歴史を歩んできた台湾においては、こうした人々の精神生活はどのような歴史を辿り、今現在どのような道を歩んでいるのだろうか。大陸中国から台湾へと渡った媽祖が、この二つの華人世界を繋げる重要な位置にいることは言うまでもなく、宗教世界の有り様が今後如何なる変貌を遂げていくのかは、華人社会の将来を見通すうえで非常に興味深い示唆を与えてくれるであろう。

## 注

- 1 徐曉望著「福建省における女性の生活と女神信仰の歴史」89頁（野村伸一編著『東アジアの女神信仰と女性生活』慶応義塾大学出版会株式会社 2004）
- 2 廟会とは、中国の神廟においてあらかじめ定められた日に行なわれる宗教祭祀の活動を言う。活動の内容は概ね道士たちによる読経、祈祷、焼香等を中心とする。祭礼の日時は廟ごとに異なるが、旧正月や主神の生誕日には、とりわけ盛大な廟会が開かれ、儀仗や楽隊が繰り出し、時には戯劇等の催しが行なわれる事もある。
- 3 <http://www.mazuworld.com/a/news/mazunews/2013/0627/11103.html> 天下媽祖網 2013. 6. 28
- 4 朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 167頁
- 5 『中華道教大辞典』（胡孚琛主編 中国社会科学出版社 1995）によれば、中国神廟祭儀の一つ。民間宗教を含めた道教の諸神は、多くが一つの廟を祖廟とするが、その祖廟から主神の神像や位牌を各家に招き入れるか、或いは別の場所に新たに廟を建立する事を、「香火を分ける」と称し、これを分霊と呼ぶ。（必ず



- しも、神像や位牌ではなく、香炉の灰だけを持っていく場合もある。)
- 6 祖廟の神像とは別に、家祀や別の場所で廟祀をする場合、奉祀するために新たに造った神像のことを分身としておく。また、朝天宮には外出しない「鎮殿媽」の他に九体の分身を奉祀し、各地の祭りで見用いている。
  - 7 朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 166 頁
  - 8 朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 167 頁
  - 9 李露露は「所謂四海並不是指東西南北諸海，而是泛指，即四周的海洋。後來才具有方向性（所謂四海というのは東西南北それぞれの海を示しているのではなく、四方（周圍）の海洋のことを指す。後に方向性が具わるようになった。）」と指摘した。（李露露著『媽祖信仰』学苑出版社 1994 49 頁）
  - 10 李露露著『媽祖信仰』学苑出版社 1994 52 頁
  - 11 清末清初に刊行された『天妃顯聖録』は、従来の媽祖に関する伝説、廟記、碑文等の文献を網羅的に集めて編纂した書であり、媽祖伝説の集大成と見做されている。
  - 12 郭喜斌著『再聽台灣廟宇說故事！』猫頭鷹出版社 2011 216-217 頁
  - 13 李露露著『媽祖信仰』学苑出版社 1994 29 頁
  - 14 ただし、ここに挙げられた大甲鎮瀾宮と北港朝天宮の間には近年確執があり、百年以上続いていた鎮瀾宮の朝天宮進香行事は無くなり、代わりに新港奉天宮への「交香」に改めてしまった経緯がある。（朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 172 頁）
  - 15 『中華道教大辞典』（前出）によれば、宗教祭祀における様々な儀式を言う。通常「齋醮科儀」と称し、道教の宗教的儀式を総称する。
  - 16 <https://zh-tw.facebook.com/2013matsu> Face book「2013 世界媽祖會北港」専用ページ 2013. 9. 16
  - 17 「ごく一般の人々の宗教認識の中心にあるのはけして道教や仏教といった体系だった宗教などではなく、現世利益的な発想を強く持った信仰のパターンといえる。」との指摘もある。（五十嵐真子著『現代台湾宗教の諸相』人文書院 2006 49-50 頁）
  - 18 蔡相輝著『媽祖信仰研究』によると、民国 61 年（1972）2 月、北港朝天宮管理委員会から発行された經典で、7 部構成になっている。当時台湾の媽祖廟には多くの住持（廟の主僧）がいたが、媽祖は仏教の佛菩薩ではないため、僧侶は毎朝晩の日課である読経の時間になると媽祖神像の前ではなく、観音殿で『金剛經』や『觀世音菩薩普門品』を読んでいた。ところが北港朝天宮は台湾媽祖廟の総本山であるがため、毎年各地から媽祖信徒が“媽祖の里帰り”（朝天宮から分霊した分身が再び靈力をもらう為に帰ってくる）に訪れて進香儀式を行うのだが、この時そのような媽祖と関係の無い經典を読むことはふさわしくないと考え、故に朝天宮特別委員会は傳妙に頼んで『天上聖母經』を記してもらい、その読経方法も教授してもらった。こうして、徐々に各媽祖廟にも『天上聖母經』が普及していったという経緯がある。（蔡相輝著『媽祖信仰研究』秀威資訊科技股份有限公司 2006 535-536 頁）
  - 19 一般には、婚出した女性が里帰りすること。媽祖の場合には、定期、或いは不定期に分霊元の祖廟に帰ることが、女性の里帰りになぞらえられて「回娘家」と形容される。
  - 20 張珣著『媽祖信仰的追尋』博揚文化事業有限公司 2008 24 頁
  - 21 <http://www.matsu.org.tw/NewsDetail.aspx?selectID=353> 北港朝天宮公式 HP 2013. 9. 17
  - 22 <http://www.matsu.org.tw/NewsDetail.aspx?selectID=357> 北港朝天宮公式 HP 2013. 9. 19
  - 23 <http://www.matsu.org.tw/index2.aspx> 北港朝天宮公式 HP 2013. 9. 21
  - 24 <http://www.youtube.com/watch?v=PLzNhbBeMfU&feature=youtu.be> 2013. 8. 4 公開  
中時電子報という台湾のニュースサイトが元であるが、当サイトの記事は既に消え、youtube 上に映像が残っているのみである。
  - 25 <http://www.guinnessworldrecords.jp/about-event/> ギネスワールドレコーズ HP 2013. 10. 29
  - 26 <https://zh-tw.facebook.com/2013matsu> Face book「2013 世界媽祖會北港」専用ページ 2013. 8. 27
  - 27 張珣著『媽祖信仰的追尋』博揚文化事業有限公司 2008 190 頁
  - 28 朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 181 頁
  - 29 朱天順著『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996 182 頁
  - 30 筆者が調査した限りでは、儀仗隊は北港國民中学校の生徒たちが、来賓案内は明道大学の学生たちが行っており、学校側の協力があつたようである。
  - 31 [http://fj.china.com.cn/2013-10/12/content\\_6366364.htm](http://fj.china.com.cn/2013-10/12/content_6366364.htm) 中国网・福建 2013. 10. 12

- 32 [https://www.youtube.com/results?search\\_query=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%AA%BD%E7%A5%96%E6%9C%83%E5%8C%97%E6%B8%AF+%E5%85%A9%E5%B2%B8%E8%81%AF%E6%AD%A1%E6%99%9A%E6%9C%83](https://www.youtube.com/results?search_query=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%AA%BD%E7%A5%96%E6%9C%83%E5%8C%97%E6%B8%AF+%E5%85%A9%E5%B2%B8%E8%81%AF%E6%AD%A1%E6%99%9A%E6%9C%83) YouTube 2013. 9. 13
- 33 『敕封天后志』や『天妃顯聖録』を見ると、明代中国の出使がボルネオやマンカラ、琉球、そして日本などの海外に航海する際、媽祖の靈応があった事を記録している。
- 34 2013. 10. 13 放送 NHK スペシャル「中国激動 “さまよえる” 人民の心」

### 参考文献

#### ◇日本語

- 五十嵐真子『現代台湾宗教の諸相：台湾漢族に関する文化人類学的研究』人文書院 2006
- 偉原著、新島翠・林雅子翻訳『中国女神の宇宙』勉誠出版 2009
- 朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996
- 徐曉望「福建省における女性の生活と女神信仰の歴史」『東アジアの女神信仰と女性生活』慶応義塾大学出版会株式会社 2004
- 福井康順、山崎宏、木村英一、酒井忠夫監修『道教 第二巻』平河出版社 1983
- 三尾裕子「漢民族の民間信仰」『中原と周辺—人類学的フィールドからの視点—』末成道男編 風響社 1999
- 李猷璋『媽祖信仰の研究』泰山文物社 1979
- 渡邊欣雄『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房 1991

#### ◇中国語

- 蔡相輝『媽祖信仰研究』秀威資訊科技股份有限公司 2006
- 郭喜斌『再聽台灣廟宇說故事！』貓頭鷹出版社 2011
- 李露露『媽祖信仰』学苑出版社 1994
- 林美容『媽祖信仰與臺灣社會』博揚文化事業有限公司 2006
- 張珣『媽祖 信仰的追尋』博揚文化事業有限公司 2008
- 張珣「媽祖信仰在臺灣之傳播與現代性」『流動的女神：臺灣媽祖進香文化特展』國立自然科學博物館 2011

#### ◇web サイト

- 中国网・福建 2013. 10. 12 [http://fj.china.com.cn/2013-10/12/content\\_6366364.htm](http://fj.china.com.cn/2013-10/12/content_6366364.htm)
- YouTube 中時電子報 2013. 8. 4 <http://www.youtube.com/watch?v=PLzNhbBeMfu&feature=youtu.be>
- YouTube 世界媽祖會北港 兩岸聯歡晚會 2013. 9. 13
- [https://www.youtube.com/results?search\\_query=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%AA%BD%E7%A5%96%E6%9C%83%E5%8C%97%E6%B8%AF+%E5%85%A9%E5%B2%B8%E8%81%AF%E6%AD%A1%E6%99%9A%E6%9C%83](https://www.youtube.com/results?search_query=%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%AA%BD%E7%A5%96%E6%9C%83%E5%8C%97%E6%B8%AF+%E5%85%A9%E5%B2%B8%E8%81%AF%E6%AD%A1%E6%99%9A%E6%9C%83)
- ギネスワールドレコーズジャパン HP 2013. 10. 29 <http://www.guinnessworldrecords.jp/about-event/>
- 北港朝天宮公式 HP 2013. 9. 17 / 2013. 9. 19 / 2013. 9. 21 <http://www.matsu.org.tw/NewsDetail.aspx?selectID=353>
- Face book 「2013 世界媽祖會北港」専用ページ 2013. 8. 27 / 2013. 9. 16 <https://zh-tw.facebook.com/2013matsu>
- 天下媽祖網 2013. 6. 28 <http://www.mazuworld.com/a/news/mazuworldnews/2013/0627/11103.html>